

## 9.11 あの日のあの時 ——日本人として思ったこと

事件の直後、私はすぐさまニューヨークに飛んだ。  
あれから 20 年、今でも忘れられない光景がいくつも。



一般社団法人 海外邦人安全協会  
理事 福永佳津子

今年、世界を震撼させた「9.11」の惨劇から 20 年の節目に当たる。マンハッタンの突端で天空を突くかのごとく威風堂々とそびえ立ち、米国の権威と栄華を象徴していたツインタワー。それが撃ち抜かれ、間を置かずして別機がペンタゴンに突っ込み、国会議事堂を、いやホワイトハウスを狙ったとされたユナイテッド 93 便がペンシルバニアに墜落した「同時多発テロ」は、一瞬にして 2977 人の命をもぎ取った。邦人犠牲者は 24 人。

### 「セカンドパールハーバー」とも

直前の 2001 年 5 月(日本では 7 月)、『パール・ハーバー』と題した映画が公開されていた。戦争が舞台だが、完全な恋愛映画で、米国の映画評論家たちは「この国の知識層は、パールハーバーへの誤解をすっかり解いている」と口をそろえていたというのに 2 機目が南タワーに突っ込んだ瞬間、テロを確信した人たちのどこからともなく、「予告もなしにテロ行為をするって日本人のお家芸だよな」となったからたまらない。市バスに乗っていた日本人学生は乗客に「お前は日本人か」と唐突に詰問され、NY 大学では日本人学生がキャンパスから出られなくなった。また、日本人と間違えられたパキスタン人女性は車にひかれそうになっている。メディアは、何の躊躇もなく“Second Pearl Harbor”と揶揄し、“kamikaze”と印字した。すぐさまアフガニスタンのビンラディンの名が挙がったが、国外に出

たら思わぬことで自国の“過去”が蒸し返されかねないことを覚悟しておく必要がある。

一瞬にして絶望と怒りと悲しみが混在する灰色の町と化した NY の市民たちは、おびたしい数の星条旗をそこかしこにくくり付け、「結束」を誓って肩を震わせていた。そんな中で、ひときわ大きな星条旗を付けたタクシーは、決まって運転手がアフガニスタン人だった。結束の輪に入りたい強い意志をあえて旗の大きさを示したものの、市民の怒りの標的になり乗車を拒否され、けんか沙汰になっていた。

NY 滞在中の定宿はバックパッカーたちが利用するドミトリーだ。携帯電話がないあの時代、受付のおばちゃんを私を捕まえて、あきれたように言ってきた。「1 台しかない電話にかけてくるのは日本人の母親ばかり。自分で危機を乗り越える力がないなら来るんじゃないよ。いちいち取りつげるかって」。



工事現場の足場にたくさんの星条旗 「米国に幸あれ」「家族と犠牲者のために祈ろう」と書かれた垂れ幕と共に

### 癒えることのない深い悲しみ

グランドセントラル駅のミッシングボードに